

# ルソー・カント・フィヒテの国家論（上）

高 田 純

## 序 論

### 1 はじめに

本年はルソーの生誕 300 年を迎え、彼の思想の内容と意義をめぐって議論が活発になっている。そのなかで本論は、ルソーの国家論がカントとフィヒテの国家論に与えた影響について考察したい。ルソーの国家論の基礎にある自由意志論はカントとフィヒテの思想全体、さらにはドイツ観念論全体に大きな影響を及ぼした。しかし、ルソーによる直接の影響はなんといってもカントとフィヒテの国家論に表れている。ルソーの国家論の影響を最も強く受けた思想家はやはりカントとフィヒテである。カントとフィヒテはそれぞれルソーの影響のもとで独自に国家論を展開し、多くの点で共通の理解に到達した。フィヒテの国家論に対するルソーの影響は有名であるが、そのわりにその内容は日本ではあまり注目されていない。また、カントの国家論に対するルソーの影響の検討も乏しいといわざるをえない<sup>1)</sup>。

### 2 ドイツ観念論によるルソー国家論の継承・発展

隣国フランスで勃発した革命はドイツの知識層にも大きな影響を与えた。しかし、社会的後進状態にあったドイツにおいては、ルソーが方向づけた革命はそのまま実現することはできず、その理論的な根拠づけと深化を余儀なくされた。この点についてヘーゲルは『歴史哲学』においてつぎのように述べている。「意志の自由」は、「人間を人間たらしめるもの」であり、フランスにおいては革命という形態で「実践」に移されたが、ドイツにおいてはそれは、とくにカント哲学に見られるように、「冷静な理論」にとどまった（HWzB. Bd.12. S.524）。

また、ヘーゲルは『哲学史講義』において、ルソーの思想がカントとフィヒテに与えた影響についてつぎのように概括的に説明している。「自由の原理はルソーにおいて高く掲げられ、このことによってカント哲学への移行がもたらされた。カント哲学はこの原理を理論的見地において自分の根底に据えた」(HWzB. 20.S.308)。カントおよびフィヒテの哲学においては「思想の形式」における「革命」が表明されている (S.313)。

ヘーゲルはさらにルソーの国家論がカントとフィヒテの国家論に与えた影響にも言及している。ルソーは「国家のための思想的原理」を「自由意志」に求め、「カントこそがはじめて自由を法の基礎にすえ、フィヒテも『自然法』において自由を基礎とする」(S.413)。

### 3 初期カントへのルソーの影響

カントの思想形成の歩みをたどれば、ルソーの直接の影響は 1760 年代中ごろにまでさかのぼる。彼がルソーの『エミール』を読んで、人間の尊厳についてルソーから衝撃を受けたことは有名である。『「美と崇高の感情についての考察」の覚書』(1764-65 年)においてつぎのようにいわれる<sup>2)</sup>。「私は、なにも知らない民衆を軽蔑した。ルソーが私を正してくれた。私は、人間を尊敬することを学ぶ」(KgS. Bd.20. S.44)。また、カントは人間の批判的観察をつうじてルソーの人間観に注目した。「ルソーは、人間の隠れた姿態のなかに深く秘められた人間の本性と隠れた法則を発見した」(S.58)。「必然性のくびきよりもはるかに苛酷で不自然なのは他人の意志への隷属である」(S.92)。「[他人に] 依存する人間はもはや人間ではない」(S.93)<sup>3)</sup>。

さらにカントは社会と道徳にかんしてつぎのようにいう。「人間は普遍意志との一致において自分を観察するときには、完全である。」「人間の唯一の自然的、必然的な善は他人の意志に対する関係においては平等(自由)であり、全体との関係においては統一である」(S.165)。「平等と統一とが結合されるならば、完全な共同体が形成される」(S.166)。ここではルソーの思想が踏まえられて、普遍意志(一般意志)との関係で自由と平等のほかには統一(連合)が強調され、真の共同体(国家)がそれらの原理の結合に基づくことが明らかにされる<sup>4)</sup>。

カントは1760年代はじめまではヴォルフの合理論の影響下にあったが、1760年代中頃にはハチソンらのイギリス道德感情学派およびルソーの影響を受け、1760年代末には実践理性の立場を明確にする。しかし、ルソー自身も他人に対する憐憫などの道德的感情を強調しながらも、同時に、理性による欲求の制御、自己支配を「道德的（精神的）自由」と見なしており<sup>5)</sup>、このような思想がカントののちの批判的実践理性の立場の確立を用意したといえる。

カントは1770年代（その倫理学的代表作は『倫理学講義』あるいは『道德哲学講義』）をへて、批判期の理性の自律＝自己立法の立場へ移行する。『道德形而上学基礎づけ』においては道德法則の自己立法が自律であることが明らかにされ、また、さまざまな人格が道德法則に従って結合することによって、道德的共同体（「目的の国」）をもたられると主張される。これは、「自分が指示した法律への服従が自由である」というルソーの政治思想を道德論へ拡張したものである。

このようにルソーの自由意志論、自律論はカントの思想、とくに道德論に大きな影響を与えた。ところで、ルソーのこの思想は国家にかんするものであるもので、それがカントの国家論そのものにどのような直接的影響を与えたかが問題である。カントは自然法についての講義を1767年から批判期の1788年まで約12回行なうと伝えられる。この講義はアッヘンヴァルの『自然法』をテキストとして使用し、用語の点でその影響を受けているが、内容の点ではルソーの影響が強い。これらの準備をへて、カントは晩年によく『法論』（『道德形而上学第1部、1797年——以下『法論』と略記）を出版した。

それに先立って、カントの遺稿集のなかでルソーの影響を受けた早い時期のものを紹介しておきたい。1769年ころと推定される覚書においてはつぎのようにいわれる。「市民契約から生じる公的人格は政治体、共和国を意味する。そこにおいてはすべての成員が結合され、最高の権力を伴うと見なされるばあいには、主権と呼ばれ、その意志によって支配されるばあいには、国家と呼ばれる。共和国のそれぞれの成員は主権の一部としては市民と呼ばれ、国家の一部としては臣民と呼ばれる。国家の相互の関係においては国家の成員は結合体の主体であるかぎり、民族（人民）と呼ばれる」（19.S.448）<sup>6)</sup>。ほぼ同時期につぎのようにもいわれる。「主権は

臣民に対する国家の（国家に対する臣民の）権利の、および臣民の臣民に対する権利の根拠である。」「したがって、権利の平等は必然的である」（S.478）<sup>7)</sup>。

#### 4 初期フィヒテへのルソーの影響

フィヒテに対するルソーの影響は最初期の『フランス革命論』（1793年に匿名で出版）に見られる。この著作の目的は、フランス革命が進行し、混乱が続くなかで、この革命の意義を明らかにしたことにある。フィヒテはフランス革命を「人類にとっての重大事」、「人間の権利〔人権〕と人間の価値〔尊厳〕の偉大なテキスト（織物）の豊かな絵画」とであると理解している（SW.Bd.6.S.39）。フィヒテによれば、ルソーは「人間の考え方の全面的な新しい創造」（S.72）を目指し、フランス革命は「ルソーの夢」（S.71）を実現しようとした。フィヒテは、フランス革命を導くルソーの思想をカント哲学（とくに自由意志論）に基づいて捉え直そうとする。彼は、カント哲学が「もう一つのはるかに重要な革命」（S.41）をもたらしたと評価し、これをルソーの国家論と結合しようとする。

フィヒテは、諸個人が相互の「市民契約」に基づき、「共同意志〔der gemeinsame Wille〕」に従って、国家を設立し、これを改変すると見なす（S.109）。この構想はルソーの『社会契約論』の大枠を受容したものであり、『自然法の基礎』（1796-97——以下『自然法』と略記）においてさらに詳細に展開される。この著作は初期フィヒテの社会論の主著であるだけでなく、フィヒテの生涯において最も詳細なものであり、この著作の理論的枠組は後期（たとえば『1812年の法論』）においても維持される<sup>8)</sup>。

カントとの関係で注目すべきことは、『自然法』がカントの『法論』（1797年）の1年前に出版されたことである。カントの『法論』はかなり以前から準備されていたが、その刊行は遅れ、フィヒテは、カントの『永久平和論』（1795年）のなかに要約された法論・国家論に注目した（『カント「永久平和論」への論評』1796年）。カントの法論・国家論の形成過程を考慮するならば、『自然法』はカントの『法論』に内容の点で先行したとは必ずしもいえないが、ルソーの見解の影響を受けながら、

多くの点でカントと共通の見解に到達し、または一部はまったく独自の見解に到達した。

フィヒテ自身もカントの見解との共通性を確認するとともに、彼の見解の独自性を強調している<sup>9)</sup>。フィヒテは『カント「永久平和論」への論評』においてつぎのようにいう。「評者は自然法についての研究を行なったさいに、今日ではよく知られているカントの諸原理〔『永久平和論』における〕とはまったく別の独立した原理からカントの結論へ、また以下で述べるカントの帰結へ思い至り、しかもその証明を見出した。それらの帰結は本書を入手するまえに、すでに講義〔1795-96年冬学期〕で公にした」(SW.Bd.8.429f.)。

カントとフィヒテはそれぞれ独自にルソーの思想の影響のもとに、国家論を展開し、結果として共通の内容に到達したというべきであろう。ルソーの影響下にあるカントの国家論とフィヒテの国家論との比較検討を行なうことが、本論の課題である。

## 第Ⅰ章 社会契約と国家設立

### 1 自然状態から国家へ

#### (1) ルソー

近代の政治思想の主流は自然状態から出発し、それを克服するものとして国家を理解する。しかし、自然状態についてホッブズ、ロック、およびルソーのあいだには見解の相違がある。

ホッブズによれば、自然状態は戦争状態（「万人の万人に対する戦争の状態」）である。戦争が実際に生じていなくても、その恐れ、その兆候があれば、すでに戦争状態である。国家の設立によってはじめて社会的秩序がもたらされ、個人の諸権利が保障される。これに対して、ロックによれば、自然状態においては一定の法（「自然の法」）が支配しており、この法によって諸個人は、「他人の生命、健康、自由、あるいは所有物を損わない」よう拘束される(TGII.§6)。しかし、自然状態においては、法の違反を処罰する権限をもつ「共同の上位者」が欠けているため、個人の

諸権利の享受は不確実である(II,§12)。自然法に反して、相手が攻撃を仕掛けるならば、相手は一方的に戦争状態に入ったと見なされ、それに対する防衛の権利が生じる。このように、自然状態は戦争状態に転化する可能性をもつ<sup>1)</sup>。

ルソーは、ホッブズのように自然状態を戦争状態と見なすことを批判する。ルソーは『不平等起源論』においてつぎのようにいう。最初の自然状態においては人々は森林のなかで散在して生活し、共同生活は恒常的ではなく、本来の規範も存在しなかった(第1段階としての本来の自然状態)。しかし、産業と技術(とくに農業と冶金)の発達とともに人々の欲望は増大し、私的所有が誕生し、各人のあいだに対立が生じるようになる(第2段階)。その結果さらに支配と隷従、暴力と略奪が横行するようになる。これを抑制するためと称して国家が設立されるが、このような国家はじつは強者の支配を正当化するものであった。ルソーはこのような第3段階の状態を「新しい自然状態」とも呼ぶ。ホッブズがいう戦争状態はこの状態のある側面を表現するにすぎない。

ルソーは『社会契約論』において、「自然状態のなかで生活することを妨げるものもろの障害がその抵抗力によって、各人がこの状態にとどまろうとして用いる力に打ち勝つまでに到達したため、人々は国家へ移行しなければならなくなった」(CS.I.6)と述べるが、自然状態における障害はなにであろうか。ルソーはすでに『不平等起源論』において、「各個人に自然状態を脱却させざるをえなくする不便」に言及している。彼は、すでに見たように、自然状態から状態へ移行する過程を3段階に大別し、自然状態における「不便」は第2段階において生じると見なしている。

## (2) カント

カントも「自然状態」から「法的状態」あるいは「公民的(市民的)状態」への移行を基本とする。しかし、自然状態についての彼の説明は錯綜しており、そこではホッブズの要素、ロック的要素、およびルソーの要素が混在している。カントは、「不法の状態」としての戦争状態から「無法の状態」としての自然状態を区別するばあいには、ロックに近い見解をとる。自然状態は「自然的であるからといって、彼[各人]がたんなる力の大小によって相互に対抗するような不法な状態であると

はかぎらなかつた。しかし、それは無<sup>・</sup>法<sup>・</sup>な状態であり、そこでは、権<sup>・</sup>利<sup>・</sup>が争<sup>・</sup>わ<sup>・</sup>れるばあい……、実効ある判決を下すべき権能をもついかなる裁判官も見出されなかつた」(RI.§44)<sup>2)</sup>。しかし、自然状態においては、個人<sup>・</sup>の占有<sup>・</sup>を他人<sup>・</sup>による侵害<sup>・</sup>にたいして保証する公<sup>・</sup>的権<sup>・</sup>力<sup>・</sup>が欠けているため、他人<sup>・</sup>によつて占有<sup>・</sup>が侵害<sup>・</sup>されるばあいには、個人<sup>・</sup>は自分<sup>・</sup>の力<sup>・</sup>によつて占有<sup>・</sup>を防衛<sup>・</sup>しなければならない。このときには戦争状態が生じる。この状態は、「だれも暴行<sup>・</sup>に対して自分<sup>・</sup>のものを保全<sup>・</sup>されてい<sup>・</sup>ない状態」である。「外的に無法律<sup>・</sup>な自由<sup>・</sup>のこのよう<sup>・</sup>な状態<sup>・</sup>のなか<sup>・</sup>にあり、またとどまろうと意図<sup>・</sup>されるばあいには、彼ら<sup>・</sup>が相互<sup>・</sup>に攻撃<sup>・</sup>しても、相互<sup>・</sup>になんら不正<sup>・</sup>を行な<sup>・</sup>わない」(RI.§42)。

しかし、カントがつぎのようにい<sup>・</sup>うばあいには、自然状態を、ホッブズがいう戦争状態に近いものと見<sup>・</sup>な<sup>・</sup>している。「人間<sup>・</sup>は悲惨<sup>・</sup>な体験<sup>・</sup>によつて他人<sup>・</sup>の敵対<sup>・</sup>的志向<sup>・</sup>を教<sup>・</sup>え<sup>・</sup>られるまで待<sup>・</sup>つ必要<sup>・</sup>はない。」「すでにその本性<sup>・</sup>からみて、彼<sup>・</sup>を脅<sup>・</sup>か<sup>・</sup>す恐れ<sup>・</sup>のある者<sup>・</sup>に対して彼<sup>・</sup>は、ある強制<sup>・</sup>力<sup>・</sup>を加<sup>・</sup>える当然<sup>・</sup>の権<sup>・</sup>能<sup>・</sup>をもつ。」「他人<sup>・</sup>に対して主人として振舞<sup>・</sup>おうとする人間<sup>・</sup>たちの一般<sup>・</sup>的傾向<sup>・</sup>を彼<sup>・</sup>は自分<sup>・</sup>自身<sup>・</sup>のなか<sup>・</sup>に知覚<sup>・</sup>することができ<sup>・</sup>る。」「無<sup>・</sup>法<sup>・</sup>な状態<sup>・</sup>において<sup>・</sup>は彼ら<sup>・</sup>は相互<sup>・</sup>に攻撃<sup>・</sup>しあつても、相互<sup>・</sup>にまったく不法<sup>・</sup>を行な<sup>・</sup>うものではない」(RI.§42)「われわれ<sup>・</sup>は、外的権<sup>・</sup>力<sup>・</sup>をもつ立法<sup>・</sup>が現れるまで、相互<sup>・</sup>に攻撃<sup>・</sup>するとい<sup>・</sup>う人間<sup>・</sup>の格率<sup>・</sup>を経験<sup>・</sup>から教<sup>・</sup>え<sup>・</sup>られるのではない」(RI.§44)<sup>3)</sup>。

ところで、カントが『世界市民的見地での一般史観』においてつぎのように述べ<sup>・</sup>るばあいには、ルソーを念頭<sup>・</sup>においているといえる。「未開人<sup>・</sup>の無目的<sup>・</sup>な状態<sup>・</sup>は人類<sup>・</sup>におけるすべ<sup>・</sup>ての自然素質<sup>・</sup>の発展<sup>・</sup>を抑制<sup>・</sup>してきたが、人類<sup>・</sup>がおか<sup>・</sup>れた害悪<sup>・</sup>を媒介<sup>・</sup>にして、ついに人類<sup>・</sup>がこのよう<sup>・</sup>な状態<sup>・</sup>を脱却<sup>・</sup>して、市民<sup>・</sup>的体制<sup>・</sup>に入らざるをえ<sup>・</sup>ないようにした」(KgS.Bd.S.25)。カントによれば、ルソーにおける自然状態は「未開人<sup>・</sup>の状態」、<sup>・</sup>「人間<sup>・</sup>の粗野<sup>・</sup>な自由<sup>・</sup>な状態」である(S.24)。

ルソーもカントも自然状態を戦争状態から区別する。カントは、ルソーが自然状態から出発して、文明状態を批判することから影響を受けた。しかし、自然状態をめぐる両者の見解のあいだには大きな相違がある。ルソーが自然状態を人間の無交渉な状態（そこでは他人との結合の感情としての憐憫が存在するが）と見なすのに対して、カントは自然状態においてすでに人間は「社交性」と「非社交性」をも

つと見なす (S.20 f.) 点に相異ある。カントによれば、非社交性が自立化し、先鋭化することによって、たしかにルソーが批判するように、さまざまな敵対や害悪が生じたが、それらは文明を進展させ、市民的体制による対立の解消を求めざるをえなくもする。このような見解は『永遠平和論』においても表明されている (EF. S.366 f.)。

ところで、カントが自然状態を直ちに戦争状態と同一と見なさないばあいには、自然状態と公民状態 (国家) とのあいだに連続性を認める。彼は、自然状態においても占有とその権利がなんらかの意味で承認されていると主張する。「ある人間が自分のものをもつ (彼にとってそれが確保されている) ということがすでにあらゆる保証の前提となっている。したがって、公民的体制の以前に (または公民的組織を度外視して) 外的な私のものおよび君のもの〔占有〕が可能であると考えなければならない」(RI.§9)。「公民的状态の設立の以前には暫定的にさえもまったくなんらの取得も法的に承認されないならば、公民的状态そのものが不可能となるであろう」(RI.§44)。

自然状態から公民状態への連続的移行というこのような見解はカントに独自のものである。彼はこのことをつぎのように説明する、自然状態においてもすでに個人の権利が「潜在的な共同意志」によって、暫定的にはあるが、承認されている。公民的状态は、自然状態における潜在的な共同意志が顕在化することによって確立される。『法論』においてはつぎのようにいわれる。「自然状態において、ある外的なものを自分のものとしてもつ仕方は物理的占有であるが、それは、共同立法における万人の意志の合一によってそれを法律的に占有するという推定を含む」(RI.§9)。「取得の理性的な権原は、万人のアプオリに合一した意志の理念のなかにもみある。この理念はここでは〔自然状態において〕不可欠な条件として暗黙に前提されている」(RI.§15)。『法哲学遺稿集』においては明確につぎのようにいわれる。「このような権力が確立される以前にも、たしかに法や法律の根拠が存在する……。ところで、このような根拠をなすのは潜在的な共同意志 [der gemeinschaftliche Wille in potencia] である。同様にして、国家の法律の根拠をなすのは顕在的な共同意志 [der gemeinschaftliche Wille in actus] である」(KgS.Bd.19.482)<sup>4)</sup>。ここでの共同意志はルソーの一般意志を念頭においたものであろう。



### （３）フィヒテ

フィヒテは＜自然状態から国家＞へという理論的枠組をあまり用いないが、一応この枠組に従っているといえる。しかし、自然状態についてのフィヒテの説明も錯綜している。フィヒテは『フランス革命論』においてはつぎのように述べていた。契約に基づいて国家が設立されるよりもまえの「自然状態」においても一定の社会秩序、権利（法）と義務がある（SW.6.Bd.S.130）。したがって、自然状態は「万人の万人に対する戦争」の状態ではない（S.129）。フィヒテはより厳密に、自然状態（自然法が支配する「第１の社会」）、国家以前の社会（市民契約＝社会契約とは異なる契約一般が成立する「第２の社会」）、市民契約に基づく国家を区別する（SW.Bd.6.S.132）。自然状態についてのフィヒテのこのような理解はロックのものに近い。

ところが、フィヒテは『自然法』においては自然状態を「万人の万人に対する戦争の状態」（NR.154）あるいは「戦争が生じる懸念がある状態」（S.193）、「全般的不信の状態」（S.243）と見なしている。このような理解はホッブズのものに近い。

## ３ 社会契約と普遍意志

### （１）ルソー

近代の主流の社会思想によれば、社会契約に基づいて国家（コモンウェス〔commonwealth〕）を設立することをつうじて各人の権利が保障される。ホッブズによれば、各人は他人との「信約〔covenant〕」によって国家にその権利（自然権）を全面的に委譲する。この委譲は個人の側からの一方的なものであり、個人と国家とのあいだに相互契約はない。これに対して、ロックにおいては、個人が相互の契約によって公共体〔community〕（広義の国家〔commonwealth〕）に自分の権利を移譲するとされるが、この委譲は全面的ではなく、限定的である。個人は社会契約（「原初的契約〔original compact〕」によって公共体を設立し、公共体は立法と行政府（政府）を選任する。公共体（その構成員としての人民）と立法府、行政府とのあいだには「信託〔trust〕」の関係がある。

ルソーは、「根源的契約[contra primitive]」(CS.IV.2)によって諸個人は結合（連合）して国家を設立すると見なす。彼はこの契約を一般的に「社会契約[contrat social]」とも呼ぶ。彼は社会契約による国家の設立についてつぎのようにいう。「共同の全力を挙げてそれぞれの構成員の人身と財産を防衛し保護する連合（結合）[association]の形態を見出すこと。この連合の形態によってそれぞれの成員は万人と結合しながらも、自分自身にのみ服従し、連合以前と同様に自由であり続ける。このことこそ根本問題であり、それを社会契約が解決する」。社会契約によって「それぞれの成員は共同体に自分をそのすべての権利とともに譲渡する」。しかし、「各人は万人に自分を与えるのであるから、[特定の]人格に自分を与えない。また、自分が譲渡するのと同じの権利を受け取らないような構成員はだれも存在しないのであるから、各人は失うすべてのものと同じ価値のものを獲得し、さらに自分もつものを保存するためのいっそう多くの力を獲得する」(CS.I.6)。社会契約によって、「われわれのいずれも自分の人身とすべての力を共同にともに一般意志の最高の指導のもとにおく」(CS.I.6)。

## （２）カント

カントもルソーの見解を継承し、つぎのようにいう。国家を設立する社会契約は「根源的契約 [der ursprüngliche Vertrag, der ursprüngliche Kontrakt (contractus originarius, compactus originarius)]」あるいはたんに「社会契約 [der Sozialkontrakt, der gesellschaftliche Vertrag]」と呼ばれる(RI.§52, §54)。カントがとくに<Kontrakt>という用語を用いるばあいには(RI.§47, TP.297, 305)ルソーを念頭においているといえる。「一群の人間が結合するためのあらゆる契約のなかで……、彼らのあいだで公民的体制を設立する契約（公民的合一契約 [pactum unionis civilis]）はきわめて独特の性格のものである」(TP.289)。「人民が自分たち自身を一つの国家へ構成する作用」は「根源的契約」である(RI.§47, Vgl.§52)。

カントは国家と個人との関係についてつぎのようにいう。根源的契約に従って、「人民に属す万人（万人と各人）は彼らの外的自由を放棄するが、それは、ある公共体の成員、すなわち国家と見なされた人民の……成員として直ちに受け取るためにである」(RI.§47)。そのさいに、「国家に所属する人民」は「その外的自由の一部」

を放棄するのではなく、「その野蛮で無法律な自由」を「全面的に」放棄するが、それは「その自由一般を、ある法律的状态において、減少させられずに再び受け取るためである」(RI.§47)。このような理解はルソーのものときわめて類似している。

カントは「合一（結合）された意志」、簡略した表現では「普遍意志〔der allgemeine Wille〕」(RI.§46)を強調する。国家は、「合一（結合）された意志」(RI.§16,§45,§51)に基づき、これを体現する。諸個人は国家のもとで「一つの意志」へ統一されなければならない<sup>5)</sup>。普遍意志はルソーの一般意志を踏まえたものである<sup>6)</sup>。しかし、ルソーとカントとのあいだには見解の相違がある。

第1に、ルソーにおいて一般意志は社会契約をつうじて形成、あるいは合成される。個人のあいだの結合行為（社会契約）の結果として、「万人のなかに一般意志が生まれる」(CS.II.4)。これに対して、カントによれば、社会契約は普遍意志に基づく。それは自然状態における潜在的共同意志の顕在化によって成立する。「普遍的な合一（結合）された人民意志から生じる根本的法則は根源的契約と名づけられる」(TP.295)。

第2に、ルソーにおいては一般意志は経験的なものに依存するのか、それから独立した理念的なものかが必ずしも明確ではない。例えば、一方で、意志が一般的となるためには、(経験的な)全員一致は必ずしも必要でない(CS.II.2)といわれるが、他方で、(経験的な)多数者の意志のなかに一般意志が表現されるともいわれる(II.2)。また、人民が十分な情報をもって討議し、全員一致に至れば、一般意志が成立する(II.3,IV.2)、さらに、さまざまな特殊意志から、相殺しあう過不足を除去すれば、一般意志が残るとも述べられる(II.3)。しかし、「一般意志はつねに正しい」が(II.3)、人民は十分に啓蒙されておらず、その意志は一般意志に必ずしも一致していないので、このような一致へ強制されなければならない(I.7,II.7)ともいわれる。このばあいには一般意志は理念化されているといえる。

このようにルソーの一般意志には曖昧さが残っている。カントは一般意志(＝普遍的意志)を「アプリオリに合一した意志」に高めることによって、このような曖昧さを払拭しようと試みたといえる。

## (3) フィヒテ

フィヒテも、国家は個人相互の契約に基づいて設立されると見なす。彼は、公共体を設立する市民契約をとくに「国家契約」(NR.S.178, S.201) 呼ぶ。「このような結合体に参加する者はたとえその自由を放棄するとしても、自分の意志を放棄することによって、自由を維持する」(S.109)。このような見解はルソーのものに近い。

カントにおいてはルソーの一般意志はアプリオリな「普遍意志」として捉え直されるが、フィヒテにおいては「共同（共通）意志[der gemeinsame Wille]」(S.151) といいかえられる。共同意志は「一般意志（普遍意志）[der allgemeine Wille]」と呼ばれることもある。これもルソーの「一般意志[volonté générale]」に対応する<sup>7)</sup>。カントと同様に、フィヒテも、万人が国家のもとで一つの意志に合一されることを強調する。「諸個人の意志がただ一つの概念に総合的に一体化されるときには、その[個々人の意志の] 公共体の意志と融合して同数の意志と同じよう個々の力が公共体と一つに融合する」(S.108)。「国家法論の課題」、「全法哲学」の課題は、「共同意志であること以外には端的に不可能な一つの意志を見出すこと」にある(S.151)。

フィヒテによれば、共同意志に向けて契約が締結されることによって共同体が成立する。「共同意志は一つの時点で表明されたものであり、それに向けて締結された市民契約によって普遍的に立法されている」(S.153)。ここでは、契約によって共同意志が形成されると見なされているようであり、この点でルソーのばあいと同様である。フィヒテは国家の設立をもたらす共同意志をとくに「根源的共同意志」と呼ぶ(S.170, S.174, S.184)。

フィヒテによれば、国家は共同意志に基づくが、個人の意志は共同意志と一体であるから、国家によって体现される共同意志に服従することは、個人が自分自身に服従することを意味する。「私が私によって吟味され、承認された法律に服従するばあいには、私は私自身の不変な意志に服従する」。「私は服従しているが、つねに私の意志にのみ服従し続ける」(S.104)。ルソーも、個人が社会契約に従うばあいには、「他のだれにも服従をせず、自分自身にのみ服従する」(CS.II.4) と述べるが、フィヒテはルソー以上に個人と国家との一体性を強調する<sup>8)</sup>。

#### 4 水平的契約と垂直的契約

##### （１）ルソー

近代社会思想においては人民（個人）と主権者（統治者）とあいだの垂直的契約は「服従契約」と呼ばれた。一方では、服従契約は暗黙に締結されたと見なされ、統治者と個人との支配関係を正当化する役割を果たした。他方では、統治者がこの契約を破るならば、個人は統治者に抵抗する権利をもつと見なされた。

ホッブズによれば、諸個人は相互の契約（水平的な結合契約）に基づいて彼らの諸権利の全体を一方的に国家（コモンウェルス）に委譲するのであり（Lev.II.17）、個人（臣民）と国家（主権者）とのあいだには垂直的契約（服従契約）はない（II.18）。これに対して、ロックは統治者に対する市民の抵抗を擁護するために、市民と統治者との契約を肯定する。ロックにおいては個人相互の水平的関係が個人と国家との垂直的関係の基礎におかれる。すなわち、諸個人は相互の契約に基づいて公共体を設立し、この公共体が立法府と行政府を選任するといわれる。人民と立法府、行政府のあいだには「信託」（一種の垂直の関係）の関係がある。行政府が立法府に反する行為を行ない、または立法府が公共体に反する行為を行なうばあいには、このような行政府と立法府は「反逆者」となり、公共体（人民）はこれに抵抗することができる（TG XIX.§226）。

ホッブズのばあいと同様に、ルソーにおいても人民と公共体は基本的に一体である。ただし、ルソーにあつては人民相互の契約は個人としての人民と全体（公共体）としての人民との契約であり、個人のあいだの結合行為としての社会契約は同時に「公共体と個人との相互の約束」でもあるとされる。「各人はいわば自分自身と契約しているので、二重の関係において——個々人に対しては主権者の成員として、主権者に対しては国家の成員として——約束している」（CS.I.7）。「社会契約は、一般意志への服従を拒否する者はだれもこれに服従するように強制されるという約束を含む」（ibid.）。しかし、主権者と臣民のこのような約束は「上位者と下位者との約束」（服従契約）ではない。「臣民はこのような約束のみに従うかぎりでは、だれにも服従せずに、自分自身にのみ服従する」（II.4）。

このように、ルソーにおいては人民相互の水平的関係は公共体と人民との垂直的関係に直ちに移行する。ただし、ルソーは、つねに根源的契約に立ち戻ることを強調しており、この点では水平的契約が垂直的契約の基本をなすことを明確にしている。「国家には一つの契約しかない。それは結合の契約である」(III.16)。

## (2) カント

カントによれば、国家を設立する根源的契約は諸個人(市民)相互の結合(合一)契約である。根源的契約は「市民的合一契約[pactum unionis civilis]」である(TP.287)。

「だれもが市民的合一契約に入るよう拘束されている」(KgS.Bd.19.560)。ところが、カントにおいては個人相互の水平的関係(結合契約としての根源的契約)は直ちに個人と公共体との垂直的関係に移行する。根源的契約において人民は一つの意志に統合されるので、この意志に基づく国家の人民とは基本的に一体であるとされる。

カントによれば、「人民の合一(結合)された意志」は特定的人格としての「国家首長」(あるいは「国家支配者」)において具現される。「人民は、すでに一つの普遍的な一方的意志のもとに結合されているものと見なさなければならないのであるから、人民は現存の国家首長が欲することと別のことを判断することはできず、またそうしてはならない」(MS.318)。根源契約においては個人はその諸権利を公共体に一方的に委譲するのであるから、個人と全体(公共体)とのあいだには契約はない。「主権者と人民とのあいだには、契約の不履行が一方の側にその破棄を権利づけるようないかなる契約も成立しない。」「人民は主権者と契約を結んだのではなく、人民の権利を代表することを主権者に委任したにすぎない」(KgS.19.593)<sup>9)</sup>。

ここでは主権と人民とのあいだの契約が規定されることによって、主権と人民との垂直的関係が強調され、人民における結合契約(水平的関係)がこれに吸収されるという危険が生じる。ホッブズは服従契約を否定することによって国家に対する人民の抵抗権を否定するが、カントも同様に、人民の抵抗権を制限する(この点については第II章であらためて検討することにする)。

### （３）フィヒテ

フィヒテにおいても国家と個人とは一体である。そのため個人相互の水平的契約は直ちに個人と全体（統治者）との垂直的契約となる。「このように個人と個人との契約をつうじて全体が生じており、すべての個人が全体としてのすべての個人と契約することをつうじて全体が完結する」（NR.S.204）。

人民は公権力を特定的人格（単数あるいは複数）に委任し、それに服従する。そのための契約は「委任契約」（S.165）あるいは「服従契約」（S.206）といわれる。ここでは、個人相互の水平的契約は直ちに個人と国家との垂直的契約に移行する。「公民的契約はそれぞれの個人が国家の現実的全体と結ぶものである」（S.207）。

ルソーも、「各人は個々人に対しては主権の成員として、主権者に対しては国家の成員として契約する」（『社会契約論』）と述べ、個人相互の契約を公共体と個人との契約と見なしている。しかし、ルソーはそのばあいにもつねに個人相互の水平的契約が個人と全体との垂直的契約の基礎にあることを明確にしている。これに対して、フィヒテにおいては水平的契約は垂直的契約に収斂される傾向がある。これはフィヒテに特有の傾向であり、カントには見られないものである。

のちに検討するように、フィヒテは「監督官制 [Ephorat]」の導入によって、国家契約に反する統治に対する個人の抵抗を間接的で限定された形態で承認する。この点ではカントよりもルソーにやや近いといえる。

#### 注

それぞれの思想家の引用はつぎの原則に従う。

- ・ホッブズの『リヴァイアサン [Leviathan]』（[Liv.] と略記）については、部と章をそれぞれローマ数字と算用数字で示す。
- ・ロックの『市民政府論 [Two Treatises of Government]』（[TG] と略記）については、第2部の章と節をそれぞれローマ数字と算用数字で示す。
- ・ルソーの『社会契約論 [Contrat Social]』（[CS] と略記）については、篇と章をそれぞれローマ数字と算用数字で示す。
- ・カントについては、Kants gesammelte Schriften（[KgS.] と略記）に基づき、巻数と頁数を示す。以下の著作は [ ] 内のように略記する。

『道徳形而上学〔Metaphysik der Sitten〕』〔MS.〕, KgS.Bd.6.

『法論〔Rechtslehre〕』〔RL.〕, Bd.6. 節番号が付されているばあいには、[§] で示し、そうでないばあいには、MS.の頁を示す。

『理論と実践〔Über Gemeinspruch: Das mag in der Theorie richtig sein, taugt aber für die Praxis〕』〔TP.〕, KgS.Bd.8.

『永遠平和論〔Zum ewigen Frieden〕』〔EF.〕, KgS.Bd.8.

- ・フィヒテについては、J. G. Fichte sämtliche Werke 〔SW.〕に基づき、巻数と頁数を示す。  
以下の著作は〔 〕内のように略記する。

『自然法の基礎』〔Grundlage des Naturrechts〕〔NR.〕, SW.3

- ・ヘーゲルについては、Hegel Werke in zwanzig Bänden 〔HzB.〕に基づき、巻数と頁数を示す。

引用文中の〔 〕は高田の補足あるいはいいかえである。原語は〔 〕内に入れる。

## 序 論

- 1) カントの国家論に対するルソーの影響についての研究として注目されるのは片木清『カントにおける倫理・法律・国家の問題』（法律文化社、1980年）である。原田鋼『カントの政治哲学』（有斐閣、1975年）、中村博雄『カント政治哲学序説』（成文堂、2000年）の専門書においてはルソーとの関係には注目されてない。南原繁『フィヒテの政治哲学』（岩波書店、1959年）においてもルソーへ簡単に言及されているにすぎない。
- 2) 『美と崇高の感情の観察』（1764年）の本体はハチソンらのイギリスの道徳感情学派の影響を受けているが、そのやや後の『「美と崇高の感情の観察」の覚書』（1764-65年）においてはルソーの影響が強まる。カントは1760年代の初頭まではライブニッツ＝ヴォルフ学派の合理論の影響のもとにあったが、ハチソンらの説の検討をつうじて、この学派の理性は評価的機能をもたないことに気づいた。この点については、拙著『カント実践哲学とイギリス道徳哲学』、梓出版社、2012年、I.1.2, II.5.1を参照。
- 3) ルソーも『社会契約論』において、「自分の自由を放棄することは、人間である資格、人間性の権利を放棄することである」（CS.I.4）と述べている。また『エミール』におい



## ルソー・カント・フィヒテの国家論（上）（高田 純）

ては、「自然への依存」、「必然性の鎖」の拘束からの解放よりも、まず「人間への依存」、「世論の鎖」の拘束からの解放が目指されるべきであるとされる（第5篇）。

- 4) 「統一」は、フランス革命における「自由」、「平等」と並ぶ「同胞愛（友愛）[fraternité]」に相当する。
- 5) 真の国家においては、「義務の声が肉体の衝動と交代し……、人間は自分の好み（傾向性）に聞き従う前に、理性に相談しなければならなくなる。」「人間を自分の主人とさせる唯一のものである道徳的（精神的）自由」が獲得される。「たんなる欲求の衝動[への服従]は隷属であるが、自分が指示した法律への服従は自由である」（CS.I.8）。
- 6) 本論の第Ⅱ章において見るように、同様の主張はルソーの『社会契約論』（CS.I.6）にも見られ、カントの『法論』においても繰り返される（RL.§43）。
- 7) ルソーも、「社会契約は市民のあいだの平等を確立するのであり、そこでは市民はすべて同一の条件のもとで約束しあい、同一の権利を享受するはずである」と述べている（CS.II.4）。
- 8) 拙論「後期フィヒテの国家論——初期理論との連続と非連続」日本フィヒテ協会編『フィヒテ研究』第20号、晃洋書房、2012年、参照。
- 9) 『自然法』の緒論のⅢにおいては「本書の法論とカント法論との関係」について言及されている（NR.S.I2 ff.）。

### 第Ⅰ章

- 1) ロックのばあいには、自然状態において認められるのは攻撃の権利ではなく、防衛の権利である。なお、カントがロックの『市民政府論』の内容を直接的にどこまで知っていたかについては問題が残る。
- 2) カントによれば、自然状態は法的状態ではないが、その内部に「適法的な社会」（家族など）を含む（RL.§41）。自然状態は「私法の状態」であるのに対して、公民的、法的状態は「公法の状態」と性格づけられる（ibid.）。
- 3) ホッブズは『リヴァイアサン』（1651年）においてつぎのようにいう。「戦争は戦闘や闘争の行為のみにあるのではなく、戦闘によって争おうという意志が十分知られている期間に存在する。戦争の本質は実際の闘争のなかにあるのではなく、その戦争状態においては反対〔平和〕に向かうなんらの保証はないばあいのすべての期間におけるその明

らかな志向のなかにある。」「戦争状態においてはなにごとにも不正ではありえない」(Liv.I.13)。この叙述はカントのものと酷似している。ただし、カントが読んだホッブズの著作は『市民論』(1642年)であると思われるが、そこにはこの叙述は見られない。カントが『リヴァイアサン』を直接にあるいはドイツ語訳をつうじて読んだ形跡は認められないが、その内容を間接的に知っていた可能性は否定できない。

- 4) ロックは、自然状態において、所有の相互尊重を命じる自然法=理性が支配していることを認めるが、この法が共同意志に基づくとは見なしていない。自然状態においては(とくに所有にかんして)同意や約束はないと見なすことがロックの立場である。
- 5) ホッブズも、万人の意志を「一つの意志」へ結合し、彼らの「真の統一」をもたらし、これに基づいて、「一つの人格」としての国家を設立すると主張する(Liv.II.17)。
- 6) ルソーにおいては、諸個人の特殊意志のたんなる総和としての<volonté du tous>(総体意志、集合意志)が<volonté générale>(一般意志)から区別されるが、カントにおいては「全体意志[Gesamtwille]」は「普遍意志[der allgemeine Wille]」から区別されずに用いられることがある(RI.§52)。『法論』においては「共通意志[der gemeinschaftliche Wille]」は社会契約以外の通常の契約におけるものとして用いられる(RI.§18)。なお、<der gemeinsame Wille>は普遍意志という意味に用いられるばあい(RL. § 8)と、共通意志という意味に用いられるばあい(RI.§19)とがある。
- 7) フィヒテにおいては「共同(共通)意志[der gemeinsame Wille]」はルソーの「一般意志[volonté générale]」に対応するが、「普遍意志(全般意志)[der allgemeine Wille]」はルソーの「集合意志(総体意志)[volonté du tous]」に対応する(S.155, S.258)。フィヒテにおいては<der gemeinschaftliche Wille>という用語は一般的でなく、この用語が使用されるばあいには、根源的な「共同意志」から区別された表面的な結託による共同意志(NR.155)という意味を与えられる。
- 8) この傾向はむしろホッブズに由来する。ホッブズは個人と国家との一体性を強調して、つぎのようにいう。「それぞれの臣民は、主権者が行なうすべてのことの本人である」(Liv.II. §21)。
- 9) カントも「市民的服従の契約[pactum subiectiones civilis]」(MS.318)、「服従契約[Unterwerfungsvertrag]」(TP.301)に言及したうえで、その成立を否定している。アッペンヴァール(カントは彼の『自然法』を法哲学の講義に用いた)はロック流の見解を継承し、

ルソー・カント・フィヒテの国家論（上）（高田 純）

首長と人民とのあいだの契約を根拠に、人民の抵抗権を擁護したが、カントはこれを批判する（TP301）。

（本論文は平成 24 年度札幌大学研究助成制度による研究成果である）